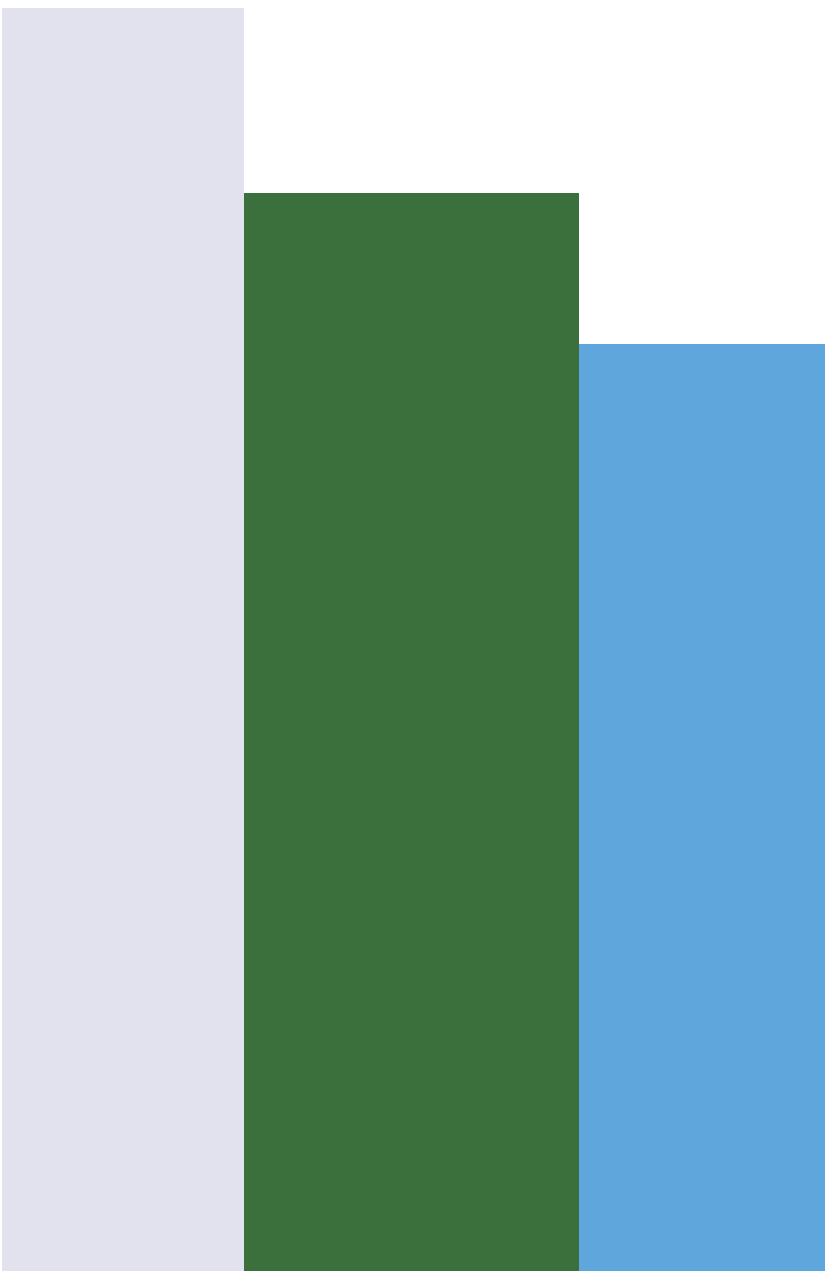


神吉研究室

和歌山調査旅行記

2020.9.28-29



目次

はじめに	高山夏奈	3
------	------	---

9月28日（月）／1日目

4

熊野古道	
滝尻王子～高原熊野神社	雨宮美夏
牛馬童子～近露散策	Pilaiporn Nunma
近露王子～継桜王子	瀬端優人
発心門王子～熊野本宮大社	興梠卓人
なかへち美術館	成原隆訓
熊野本宮大社・大斎原	高山夏奈

9月29日（火）／2日目

11

南方熊楠記念公園	
川久ホテル	雨宮美夏
各班自由行動	瀬端優人
チーム成原	
チーム中村	Jefferson Edmond
チーム清山	高山夏奈
紀伊田辺駅	西田造・北垣直輝・清山陽平・太田通裕
	清山陽平

はじめに

本研究室では毎年夏になると国内あるいは東アジア各地を巡る調査旅行を行っている。
都市スケールから建築や都市そのものを考える勉強として得るものが多く、コロナ禍の中でもなんとか、ぜひ、と思っていた。
本年度は田辺市熊野ツーリズムビューロー 小川さんの手厚いサポートのもと、神吉先生のフィールドであった和歌山・熊野古道で開催することができた。

この冊子は今回の調査旅行で各グループが歩いた熊野古道・中辺路や田辺市内の各所を中心に、各自が感じたことをまとめたものである。
この冊子に満ちている、私たちの感じた新しい風景との出会いへの歓びが読者の皆様にもおすそ分け出来ればと思う。

今回、旅行の相談にのっていただいた小川さんには宿やタクシー、お弁当の手配までしていただいた。1泊2日と例年より短い期間ではあったが、小川さんのお陰でいつも以上の学びがあったように思う。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

(たかやま・かな)

神吉研究室
和歌山調査旅行

—旅程—

9.28(月)

- 10:00 紀伊田辺駅集合
熊野古道散策(4経路)
- 14:45 熊野本宮大社
- 15:30 大斎原
- 17:00 川湯温泉到着

以降自由行動



DAY 1

熊 野 古 道

滝尻王子～高原熊野神社

Member：太田先生・中村文彦・雨宮美夏・北垣直輝

4手に分かれた熊野古道を巡る行程で、「最もきつい」と言われたのがこのコースだ。滝尻王子から、特に剣ノ山経塚跡間の道程の勾配が急なのだ。距離は4kmと長くはないが、1時間では歩けない。

川辺の滝尻王子の背後、涼やかな緑陰の間に、踏み分け跡のような道が続く。それはやがて、何やら不穏な勾配で斜面を登り始める。よく晴れた日差しは程よく遮られ、葉裏の緑も木肌も目に心地よいが、勾配が不穏だ。最もきついと聞かされているだけに前途を思うと身構えてしまう。

大文字山に至る山道ほどの道幅も、路面の平坦さもない。そもそも路面という概念はないようだ。時折、側面に石が支えのように積んであるくらいだ。それでも、木の根や露出した岩や石が足がかりとなり歩くには困らなかった。

どうしてそこに止まっているのか不思議なくらいの大きな岩が、ごろごろと斜面に顕れていた。胎内くぐりの



岩もその一まとまりである。入口は屈んで通れるくらいの高さで、途中斜め上方へくの字に折れ曲がる。出口も狭いが、荷物を下ろせばさほど難しくない。ただ、そうして何とかくぐった瞬間、岩に囲まれた暗がりの印象を留めていないことに気づき、惜しいことをした気分になった。目指す光や足がかりになる岩肌ばかりに気を取られて出た先は、岩をくぐる前と同じ世界で、実は岩の中の方が特別な空間だったように思われた。それともやはり、くぐる前と後では、少し違っているのだろうか。

道の途中の細い木は伐採されていて、その幹が横手に積まれている。というよりも、それら丸太が転がっていないところを歩くようになっている、というのが正しいのかもしれない。耳をすませばチェーンソーの音が穏やかに聞こえる。途中、開けたところに切り株と丸太がいくつも転がっていて、数人が森林浴のように休んでいた。

正午も近づき、途中にあるという展望台を探している



と、急に手すり付きの階段が現れた。よくある見慣れた出立の手すりでも、それまでの道の様子があまりにささやかなので、面食らうところがある。階段の上は想像していたような展望台はなく、確かに平らで視界は開けているが、4人座る面積すら怪しい広さだ。これが展望「台」ということらしい。集落とそれを囲む山々が見渡せた。

展望台を降りると、石畳の下り坂が現れた。道の終着の予感と共に降り切ると、車道に交差する。しかし、熊野古道は車道をまたいで続いていた。再び道は山へ入る。途中数カ所で、まだ青みのあるいも栗が落ちていた。

直に民家が見え、右手に建物がぼつぼつと続くようになり、道が舗装され、山道は収束するように集落到ち替わる。

ゴールの高原霧の里休憩所で昼食を食べた。斜面の中腹にあって見晴らしがよく、空は青々と眩しい。熊野古道は続くが、一区切りとしては、気持ちよく達成感のあるゴールだった。

(あめみや・みか)

熊 野 古 道

牛馬童子～近露散策

Member : 清山陽平・Pilaiporn Nunma・大橋茉莉奈



“The Imperial Route” is the nick name of Nakahechi which was used by emperors since the 10th century to pay respect to the Kumano Sanzan. In the past, the trail began from Kyoto as the old capital, but now starts from the south of Tanabe city. On that day, we took around 40-minute driving by Marina chan’s car from Kii-Tanabe Station to the start of the trail. We were arrived at the car parking near the starting point around 10 am. Our team: Me, Kiyoyama san and Marina chan, with dark colors clothes and hat, were walking across the big street and stated to hike with a lot of energy.

This hiking route is well-marked, so we

didn’t worry about getting lost. The woodensigns along the way could be seen clearly and written in both Japanese and English. We were surprised that some signs were written in France and other language. By following the wooden signs with white lettering, we could get to the top of the mountain easily in around 2 hours.

Though the walk mainly features thick forests, we have met some hikers. “Ohayo-gozaïmasu” we have greeting with smiles to others. The well-maintained trail with fresh air and some light getting through the trees made us feel very relax. Many topics about our childhood experience relating to nature were

sharing during the trail.

Nearly the end of this trail, the wooden pavilion has been built right on top of sections of the trail. We took some rest, having some snacks, enjoying the beautiful scenery of the village, capturing a good moment, and then walked down into the valley villages. At the restaurant, we agreed that walking the ancient Kumano Kodo is a fantastic way to experience the unique cultural landscape of this Kumano area. Green, calm, warm light, and the spiritual countryside are what we have learned.

(Pilaiporn Nunma)

熊 野 古 道

近 露 ～ 継 桜 王 子

Member : 神吉先生・瀬端優人・西田造

私たちのチームはなかへち美術館から熊野古道の名所で継桜王子まで散策した。神吉先生と一緒にであったこともあり、今まで熊野古道がどうであったかも聞きながら、ただの世界遺産としてではなく様々な視点で見ることができた。道中、神吉先生がプロジェクトで補修した住宅や、新しくなった小学校などたくさんのお話を聞きながら道中を進んで行った。途中楠山坂登り口あたりで土砂崩れしていて通行止めとなった。そのため熊野古道ではなく途中公道を歩くハプニングなどもあった。

道中何個か点在する集落を通った。神吉先生曰く、どんどん空き家が増え、住人が減っていつていう。その中でもちゃんと生活の痕跡がある家はきちんと残っており、まだ大丈夫でよかつ



たと言っているのが印象的であった。世界遺産を歩くという意識で熊野古道を訪れたが、なんというかとても普通の道で集落だった。そもそも熊野古道が参詣道となったのは都落ちした上皇などが神秘的に感じてできたものであり、そこに住んでいる人たちにとっては普通の居場所である。そのため訪れてもやっぱり普通なのだ。そして、継桜王子・とがの木茶屋についた。もともとここにもある有名なおばあちゃんが住んでいて、来る人たちをもてなしていたそうだ。亡くなった後も自由に使える休憩スペースとなっている。茅葺き屋根の小屋と紅葉がなんとも印象的だった。美味しい昼食を食べながら道ゆく人とお話したりとても温かい空間だった。そして近くの継桜王子の境内には杉の巨木郡、野中の一本杉があ



る。那智の方を向いているといういわれがあるが、実際はわからない。ちなみに熊野古道の住民の方はこの杉でどれだけの家を建てることができるか聞くという。なんとも世俗的というか、普通というか。少なくとも神聖だという意識ではない。とてもきれいで落ち着く場所であるには変わらないが、世界遺産とはいえ住民にとっては身近な場所であるというギャップがなんとも面白かった。

その後、最後の目的地の野中の清水にいき、湧き出る水を飲んだ。そして帰りのタクシーを待っているとある軽トラックがやってきた。するとその軽トラックは見事な切り返しの後、物凄い勢いでバックしすごい音を立て中がら急坂を登って行った。なんともかっこいい日常に会えて締めくくりとなった。(せばた・ゆうと)

熊 野 古 道

発心門王子～熊野本宮大社

Member：成原隆訓・新靖雄・高山夏奈・興梠卓人



研究室旅行から半年という時間がたってしまいました。しおりや写真を見つつ、当時のことを思い出しながら書きます。

助手席に高山さん、後部座席に成原さん・興梠・新さんという盤石の布陣でタクシーに乗り込み、熊野古道なかへち美術館へ。道中 21Century なんちゃらとかいうパチンコ店を見て「あれが 21 世紀美術館らしいですよ」「パチンコ店の建築計画って考えたことないけど運転者の視界で目立たないといけないですよね」みたいな会話をしました。あとは二階幹事長のポスターを見て、白浜空港は半沢直樹に登場する伊勢志摩空港のモデルではないかといった真偽不明の論を交わしました。なかへち美術館はガラス壁と天井の処理が SANAA でした。休館中に入れてくださりありがとうございます

す。ここで少し歩いて近露郵便局を訪問。朱文字の局名看板がかっこよかったです。高山さんも風景印を押してもらっていたので今回の裏ミッションであるところの「研究室に風景印を布教する」上々の滑り出しです。

それから発心門王子まで移動し、熊野古道を歩きだします。熊野街道には〇〇王子という参拝スポットがいくつもあります。卒業設計のため歩き回った阿倍野区にも「阿倍野王子」がありました。僕は旅行先で見つけたスタンプはすべて押すという十字架を背負っているのです、各王子に設置されているスタンプをすべて押しつつ歩を進めました。ぺたぺたててく。

成原さんがサングラスをかけながら、サングラスをかけて生活していたらその場所の心象風景はレンズを通した色になるのだろうか、といったことを話してい

ました。

道端に佇む謎の木彫り人形やかかしを尻目に山路を歩き続けましたが、集合時間に熊野本宮大社に着くのはどうやら無理ということに気づき、迎えに来てもらうことにしました。行程の半分くらいで弁当に手を付け、食べ終わったところにタクシーが来て君ら軟弱か？みたいな煽りを受けました。そこで僕はすかさず「いや、まだ余裕で歩けるけどこっちには集合時間があるんじゃない！」と言いたかったのです。まあ言わないですよ。

時間ぎりぎりなのに本宮郵便局に寄り、今度は成原さんも風景印をもらっていました。来年度僕が研究室旅行にいらなくても、風景印を押しにいく人がどうやら現れそうで、大変満足しています。（こおろぎ・たくと）

熊野本宮大社・大斎原

DATA

設 計 : 不明

S i n c e : BC33 年頃と伝えられる

住 所 : 和歌山県田辺市本宮町本宮 1100



分散移動の末、一行がたどり着くのが熊野古道の終点・熊野本宮大社である。熊野三山の1つであり、家都御子神を祀る。サッカーでお馴染みの八咫鳥の文様は本宮大社由来である、と言った方が馴染み深いかもしれない。

各班、多かれ少なかれ中辺路を歩いて疲労困憊のところに、最後のトドメと言わんばかりの158段の石段が続く。

石段を含め、現在の本宮大社は明治22年の洪水後、明治24年に大斎原から高台に移転した際に作られたものである。

私はこういった石段を見る度に、昔の人はGPSも測量機もなしによくこれだけ綺麗な直線を描くものだと感心してしまう。縄を張れば良かったのだと分かってはいても、実際にやって見るとズレてしまったり石の細工で歪んだりしてもおかしくない。

中辺路で見られた、味のある庭石のような石段とはまた違った風情を感じた。

石段と大きな門を経て、社殿にたどり着く。檜皮ぶきの分厚くも柔らかい曲線の屋根を持つ、存外小ぶりな4つの社殿が横1列に並ぶ。現在の本宮大社は明治になってから作られた場所であるが、洪水を逃れた社殿を移築した為、建築自体の歴史は古い。渋い色をする木材と吹き替えられた檜皮のコントラストが美しい。

社殿を拝見後、神吉先生が何やら買っていたので聞いてみる。熊野牛王神符と呼ばれる漢字ではなくイラストのような御札で、後で調べるとカラス文字という鴉で象られた文字で書かれている、特殊なものらしい。

熊野三山それぞれのデザインがあり、熊野古道で見られる王子社と合わせて、スタンプラリーのような収集癖をくすぐる仕掛けに少し俗っぽさを感じるところが、伊勢や高野山との違いを感じるどころだ。

再び石段を降りて小休憩の後、大斎原に向かう。川の中洲にあったこの地は、参拝者が禊も含めて川を渡りたどり着く土地である。幾日もかけて古道を歩いた人々が汚れを落としてたどり着く広大な聖地、という完璧なストーリーで作られていた熊野古道の終点は、度重なる洪水のために今や原っぱ同然である。安全のために移築され、交通網の発達により何日もかけて古道歩かなくなった今、熊野本宮大社の守るべき真正性はどこにあるのか。今一度考えたい課題である。(たかやま・かな)

熊野古道なかへち美術館

DATA

設 計 : 妹島和世 + 西沢立衛 / 妹島和世建築設計事務所

S i n c e : 1998 年

住 所 : 田辺市中辺路町近露 891

紀伊田辺からタクシーに乗り、川筋に沿って森の谷道を通り過ぎる。運転手が川の増水の凄まじさを私たちに語ってくれる。今は全く想像すらできないが、不思議とその恐ろしさに実感が伴った。紀伊の自然はそれほどにうつろい易いのだろう。

私たちは他班の歩く山道を通り過ぎ、車で近露の集落に至った。森を抜けると田畑の向こう、段状に背丈の低い民家が見えてくる。

少し行くと川のほとりに、思いのほか背の低いぼんやりしたガラスの矩形が、荒い粒子の陽の中に佇んでいた。先の話からするといささか川に近すぎはしないか。ファサードのフィルムが取り払われ、中が露わだったのも予想と異なり、展示室への立入も叶わなかったが、それゆえに展示室を取り巻く共用部のみが体験された

ことで、一層その自律性を感じ得た。

中央を囲む一繋がり of 細長い空間形式をとりながら、周囲を巡るたび形態は柔らかに変容する。隙間が広ければ自ずと佇んでしまい、狭ければ先を急がされる。歩を進め、ガラスが我々に迫る時、周囲の風景もまた我々に近づいてくる。外に立ってただ眺めている時以上に風景に親しさを覚える。このように内部には周囲の光を受け入れつつ、外部には自身の存在を殊に示さない、確たる形式を持ちながら消えゆく光の結晶である。

立ち去る間際に南側へ回ると、大木を背に機械室が居座っている。村には半透明で穏やかな顔を持ちながら、山に向かっては確たる厚みを持っている。そして川に対しては自身の存在を消し去り、風景を見せるための



スクリーンを大きく開いている。

設計者はテキストの中で、機能ヴォリュームの飛び出しによって各立面の表裏を解消した旨を述べている*。しかしながら、やはりこの建築は風景に対してある厚みを持った半透明の膜のように見える。そこに確かに存在していることは感知できるのだが、概念的には存在していないとも言える地面に挿し入れられたミラーガラスのように。私たちは決して経験したことのないガラスの狭間に投げ込まれた光の振動をこの建築を通して知覚することができるのではないか。そして割れたとて諦められるほど華奢な存在として在り続けるのだろう。

(なりはら・たかのり)

* 新建築, 1997 年 7 月号, p. 131

和歌山調査旅行

—旅程—

9.29 (火)

09:00 ホテル発

10:15 南方熊楠記念館新館

12:00 南紀白浜とれとれ市場

昼食

グループに分かれ自由行動

18:15 紀伊田辺駅 解散



南方熊楠記念館新館

DATA

設計：小嶋一浩＋赤松佳珠子 / CA t
 Since：2016 年
 住所：和歌山県西牟婁郡白浜町 3601-1



岬一帯が番所山公園になっていて、二ヶ所の高台のうち一方に灯台が、もう一方に南方熊楠記念館が建つ。かつて植物園だったことを容易に偲ばせる、亜熱帯の植物に出迎えられる。南国情緒溢れる置物が鬱蒼とした茂みからひょこりのぞく。見慣れない葉の大きさ、葉の艶、背の高さや幹の質感に目を引かれ、当惑したような気分になりながら、意外に急な坂を上りきると、アールの付いた開口と、RCの壁に囲われた不整形のピロティに迎えられた。

開口を通して、頂の向こう側に、視線は抜けるとも抜けないともいえる。抜けるというなら、梢を貫通して、意識が向こうへ抜けるのだろう。ピロティの陰は木陰と混じりあうようだった。2階部分の外装の白いモルタルに踊る木漏れ日、明るいエントランス、その吹き

抜けに懸かるランタン（南方熊楠の文字等が転写されたものだが、絡まりあった植物のようにも見える）、それら一連の陰影の印象によって、森の中の体験が建築の内部まで引きずり込まれたようだった。さらに柔らかな曲線の外壁と大胆にとったピロティが、地面レベルの建築の輪郭が曖昧にさせる。記念館というより展望台の階下のような、控えめな佇まいだ。

新館の曲線は2階へ至り、誘うような内部空間をかたどる。本館への展望ブリッジも、テラスへ至る階段も、行く先から視線を逸らすように緩やかに曲がる。曲線の微妙な緩やかさのために、見通しのきかないのが愛嬌にも感じられる。展望ブリッジには、明るい太平洋を望む水平窓に向かって、カウンターが設置されていた。コロナ禍のために、席での長時間の滞在がでな

いのが残念だった。

屋上部分のテラスは眩しかった。日差しが痛い。白いから眩しいのかもしれない、と話し合った。森の陰影を引きずるような一階、明るすぎない展示室との対比で余計に眩しく感じたのかもしれない。内部の仄暗さに比べると、テラスの眩しさは粗雑にさえ感じられた。

塔屋部分まで登ると、本館からラッパのように新館が伸びているのがわかる。新館が本館から継承したのは見たところ白い外壁だけのように思われたが、それだけでも、不思議な一体感を保っていた。紀伊半島と太平洋を望むパノラマにおいて、近景の白い建築の差異はその程度に映るのだろう。

（あめみや・みか）

川久ミュージアム

(ホテル川久)

DATA

設計：永田・北野建築研究所

Since：1991年

住所：和歌山県西牟婁郡白浜町 3745

二日目、白浜での建築巡りはバブル期に建てられた、言わずと知れた豪華絢爛な建築から始まった。「村野藤吾賞」を受賞している「ホテル川久」である。1989年、「世界の数奇屋」を作る壮大なプロジェクトが始動した。そして作られたのがこの「ホテル川久」である。「ホテル川久」は、総工費400億、延床面積26,000平方メートルという大規模な建築である。そして2020年6月、ホテル川久がオーナーズコレクションを一挙公開した私設美術館「川久ミュージアム」としてもオープンした。オープンして間もない「川久ミュージアム」を見学してきた。

エントランスを通り、まず目に飛び込んできたのは床一面のタイルと金箔張りのドーム天井である。今では考えられないような豪華な風景が目の前に広がっていた。床には一枚一枚丁寧にタイルが貼られ、シュトックマルモ技法というほとんど見かけることない手法で作られた美しく力強い柱が並び、天井の高い金箔のドームを支え



ている。そしてその柱の間に様々なコレクションが置かれている。ホールの奥には光が良く入るラウンジがある。息を飲むとはこう言うことを言うのだと思った。

エントランスホールだけでもなんとも見応えのある建築である。さらに歩を進めていこう。これまた美しい金の螺旋階段を登り、二階の回廊部分へと進む。近くなった天井や二階の壁を見るとそのディテールにまた驚く。そしてそこに並ぶ様々な絵画である。見所しかない。二階の見所は、和式、洋式それぞれの宴会場ホールである。和式の斗酒千吟、洋式のサラ・チェリベルティ洋宴会場である。斗酒千吟の天井にはシャンデリアがかけられ、奥には中尾淳氏の「六曲一双」が飾られている。任侠の世界を想起させるような奥に長い座敷の間であり、一度真ん中で正座をしたくなるような空間である。サラ・チェリベルティ洋宴会場には天井一面にジョルジオ・チェリベルティによって「愛と自由と平和」をテーマに絵が描かれている。音が良く響く空間で、ここで社交ダ



ンスを踊ったり、演奏がされたりしていたのだろうと、人で賑わっている風景を想像できる。他にも要所要所にバブル期の賑わいをイメージさせるような空間、装飾が散りばめられていて、とても楽しい建築だった。

最後にラウンジでアフタヌーンティーを楽しんだ。席に座りそこから見える大きなガラス越しに外を見たり、シャンデリアを見たりその場所を楽しみながらコーヒーを待つ。なんと優雅な時間だろう。他のカフェではこうはいかない。バブル期を想像させるととても豪華な空間で贅沢に時間を使うからこそ得られる体験であろう。この建築は美術的な価値、建築的な価値はもちろんだが、それ以上に空気感の保存という点で、ものすごい意味があると感じた。

そしてティーカップがやってきてアフタヌーンティーを楽しんだ。体験したことないバブルを想像しながら、あるいは擬似体験していると言えるかもしれないが、豪華な空間とお茶を楽しんだ。(せばた・ゆうと)

チー ム 中 村

川久ミュージアム…

…三段壁洞窟…白浜郵便局…

…瀬戸の浦南部の集落調査…御船足湯

Member : 神吉先生・中村文彦・高山夏奈
瀬端優人・興梠卓人

豪華絢爛・これぞバブルの遺産と言った川久を後にして、次は自然豊かな場所を見に行こうということで三段壁洞窟に向かう。

展望台から雄大な太平洋と逞しい崖の景色を味わうだけではなく、どうやら水面の近くまで洞窟で降りれるらしい、ということでエレベーターで36メートルの地下まで降りていった。

三段壁の洞窟はかの熊野水軍が隠れ家に使っていたと言われ、展示でそれが再現してあった。他に洞窟の中で祀られる祠・牟婁大辯才天がある。余談だが、べたと柱に貼られた名前付きのシールはどういう意図のものなのか、単なるマーキング？と首を傾げていたのだが、HPによると千社札と呼ばれるものだそうで、公式に認められたものらしい。(だが、やはり記念目的だそうで、なんとも言えない気分になった)



他にも、リップルと呼ばれる、波模様の天井は約1600万年前に波や潮流によって海底の砂や泥が動かされて地層の表面に作られたものや地層の美しい岩壁など、自然の雄大さを感じる展示もあり、かなり充実したスポットだった。

その次に向かったのが、白浜郵便局である。恐らく今年の研究室旅行の1番の話題提供が興梠くんがエスキスで発表した「風景印」とよばれるご当地消印を求める郵便局巡りではないだろうか。三段壁に向かう途中で見かけた郵便局でも風景印をもらうため、立ち寄ることにした。(当然、運転手のおじさんには不思議がられた)

白浜郵便局の風景印には3つ、円月島とハマユウと呼ばれる花、温泉マークが載っている。52円で得られる小さなお土産である。



その後は風景印にも描かれた円月島がよく見える瀬戸ノ浦周辺で集落調査を行なった。というのも、先生が車窓から覗いていてかなり古い家が並んでいるのに気づいたとの事で、「研究室旅行」らしいフィールドワークが予想外に始まった。

コンクリート瓦の話、母屋と離れのある立派な家、建築の高さからの年代推定、どうやら観光業の寮などが昔からあった地域なのではという話、外壁のパステルカラーが流行った時代についてなど、次々と話が膨らんでいく。授業やゼミだけでは出来ない体験があることに、このご時世に研究室旅行を行なった意味があったのではないだろうか。

1時間ほど歩き回り、疲れた脚をタクシーを待つ間に御船足湯で癒す。円月島と沈む夕日は旅行のフィナーレに相応しい、絶景であった。(たかやま・かな)

チー ム 成 原

川久ミュージアム…白良浜…千畳敷

Member : 成原隆訓・Pilaiporn Nunma
Jefferson Edmond・雨宮美夏

The first destination was the fish market near Kawakyu Hotel. At the fish market we found a lot of raw fish and looks so delicious, so we decided to had lunch there and bought some souvenirs. From the fish market we went to Kawakyu Hotel which its entire building was the museum itself. The design of the building was very exotic and looks like a combination of European+Chinese+Japanese design.

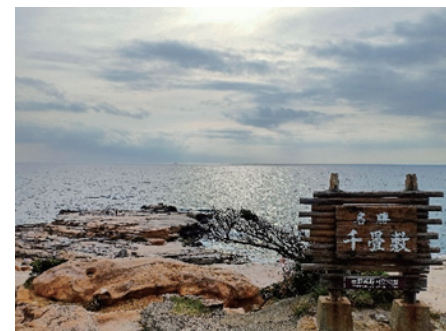
We spend around one hour in the museum. After that we did not have any clue what to do next, but luckily the taxi driver was very kind and had a lot of reference for traveling around Tanabe City. We had a lot of fun in the way by the taxi, Narihara-san said that he had been have a holiday trip with his family when he was a child and at the hotel which he stayed before, the hotel gave an ice cream cake and put it to each of visitors room. He very nostalgic with the



cake, so we decided to visit that cake store and ate some of the cake.

After we finished relaxing at the cake store, again, we did not know what kind of places that we will visit next. The taxi driver gave some recommended spot in Tanabe City, so we went to the nearest spot first. The taxi driver brought us to a beautiful beach, and the sand was very white, clean, and sparkling.

Tanabe City surrounded by sea, so maybe it will be good if we can see the other sea-side of Tanabe City. The next spot was Senjojiki clifftop (千畳敷). The clifftop was very beautiful with a relaxing environment, the wind blew so good and I was feel taken out from my daily stress (笑). I thought it will be good if we can stay until we can see the sun set here, but we did not have such a free time to just spending



time there. Maybe it was just fifteen or twenty minutes, after that we start to visit the next spot.

When we checked our time, we did not have a lot of time left, so we just visit the other spot where on the same way to the station. We remembered that Kanki-sensei (our lab's professor) always brought some Oranges from Wakayama, and those Oranges were from around Tanabe City. Before we reached the station, luckily we can found a big supermarket that selling those Oranges and bought some before we finished our trip.

I feel blessed because I entered the Kanki-sensei's Lab and had this kind of travel with the other lab's member. These kind of experience will be a great memory for me and I hope we can travel again together.

(Jefferson Edmond)

チー ム 清 山

川久ミュージアム…串本大橋…
…潮岬観光タワー

Member：太田通裕・清山陽平・北垣直輝・西田造

「串本ならギリギリ行って帰れないですか？」
軽い気持ちで言ったのがはじまりだった。自由行動の5分の4を移動が占める串本弾丸ツアーが幕をあける。タクシーのおっちゃんの制止も振り切り、長いトンネルをひたすら突き進むこと一時間半、その先に見えてきたのは串本特有の風景だった。黒々とした岩石群が海の中からぬるりと顔を覗かせている。非常に力強い風景なのだが、椰子の木の生える道路沿いののんびりした雰囲気とはなんともミスマッチで、そのギャップがまた可笑しかった。集合におくれまいとブンブン飛ばすタクシーの中、ふとそんなことを考えたのだった。
(にしだ・いたる)

本州最南端の地、串本町へ行く。その場所は最果ての地らしく閑散としており、曇り空と同じ色の潮岬タワーが大きく構えているだけであった。海からの風を



防ぐ建物も木々もほとんどないために最南端であるにも関わらず、九月とは思えないほど寒いのである。そのような土地に見逃してしまいそうなほど小さな小屋が一軒ポツンと建っている。Cafeshop あさひである。ここで飲んだコーヒーは少し酸っぱく最果ての広大な景色と共に忘れがたいものであった。

(きたがき・なおき)

しめて往復3時間のタクシードライブは、存外、退屈しなかった。特に印象に残っているのは、運転手との取り留めのない会話だ。「白浜は不便なもんですよ、駅も空港も幹線道路も、まちの外れにある」「ここらは田辺の文化圏なんです。高校生の学校も遊び場も、大人が飲みに行くのも、みんな田辺」。実に中距離移動民らしい都市構造の解説は、実際の移動の感覚や移り変わる風景と相まって、この上なくリアルな南紀を教えてくださいました。
(きよやま・ようへい)



特定の建築や場所を目的地にする旅と、地域を感じる為の探索の旅は異なるアプローチであると思う（どちらかというと弊研究室は後者に重心があるように思う）。今回は、本州最南端の串本町を漠然と目指したが、時間の制限から前者タイプの旅となった。タクシーから2度しか降りず、男気ジャンケンとドリンク一杯だけの、その地を味わう間もない滞在だったが、同行した3名は皆達者に筆を走らせている。建築をやっていると自身の経験を物語として再構築する能力が培われるのだろうか（あるいは個人によるものか）。通常ありえない旅程で実行された田辺一串本旅の、3者3様の旅行記は意外と力強く、豊かだった。（おおた・ひろと）

<最後に我々の無理を快く引き受けて頂き、車内を盛り上げて下さった運転手さんに感謝致します>

紀伊田辺駅周辺

DATA

設計：-
Since：-
住所：和歌山県田辺市（旧田辺町）

三時間弱の運転の末、集合場所の近くで一番安価な駐車場、「Times 紀伊田辺」に着いた。

紀伊田辺は近世(1606)からの城下町であり、中辺路・大辺路の玄関口(口熊野)でもある。何気ないコインパーキングは実は、町人町の中心であった長町(現北新町)に位置し、また旧熊野古道の一部である栄町通りに面する、歴史的にも重要なポイントであったと、後から学んだ(すぐそばには旧中辺路への「道分け石」も残っていた)。そうとも知らず車を降りると、点在する大正期と思われる町家もさることながら、昭和期の魅力的な跡形が無数に残る見事な町並みに目を奪われた。集合場所の JR 紀伊田辺駅へ歩き始めると、すぐに幅約 2m 程の路地に差し掛かるが、ここから先は城下町の外、旧湊村である。昭和初期(1932)の駅設置後、城下町との間が非計画的に市街化した結果の入り組んだ路地網には、飲食店



が集積した。中心市街地活性化のため「味光路」と名付けられ、1998 年に環境整備が行われた当地域は、現在もスナックや居酒屋、料亭等が凄まじい密度で連なる、県随一の繁華街であると後から学んだ。このように午前も圧巻であったが、翌日の解散後にはここに灯がともり、煩雑なまちのあちこちに地元客があふれる夜の繁華があった。抜けた先のコインパーキングで見上げると、漁師や農家等、夜遊する近郊民を支える運転代行の象徴たるモータープールがそびえていた。駐車料金は丸 2 日で 1100 円だった。

近世城下町としての町割りの成立、昭和期の跡形が多く残る地方都市の町並み、鉄道駅設置を契機に拡大した非計画的な市街地、とりわけ駅前路



地網のスナック集積、煩雑な市街地空間に溢れる地元客らによる夜の繁華、周囲の漁村・農村文化との混淆、おいしい魚・野菜・お肉・お酒、広くとらえれば熊野古道から鉄道交通や運転代行にまでかかる南紀拠点都市での移動と接触の在りよう、やけに多いまちなかの蠱惑的な喫茶、etc。紀伊田辺には、自分を強く惹きつける現代都市の奥深い魅力が潜んでいるように思う(一方でアーケードの撤去や駅前修景等の景観整備が進行中のようで、個人的には危惧している)。きっと再訪し、いずれはゆっくりと、腰を据えて研究したいと思う。(きよやま・ようへい)

・濱田学昭「田辺市の街・環境のデザイン：理解と支持の基盤」,「～熊野古道街道で探る～歴史と向き合う街とは、癒しの風景とは」都市環境デザイン会議関西ブロック 2004 年度第六回都市環境デザインセミナー,セミナー記録
・山口秀文「和歌山県田辺市における都市計画街路に関する研究-1940 年の都市計画街路を中心とした分析-」日本建築学会近畿支部研究報告集,計画系, vol.54, pp.469-472, 2014
・近畿経済産業局「田辺市の中心市街地における商店街振興の取組」2018



神吉研究室 和歌山調査旅行記 2020.9.28 - 29

2021年4月発行

発行
神吉研究室

編集
雨宮美夏

旅行企画
高山夏奈

旅行参加者
神吉紀世子
太田裕通
清山陽平

Pilaiporn Nunma
成原隆訓
大橋茉莉奈
新靖雄

中村文彦
雨宮美夏
瀬端優人
高山夏奈

Jefferson Edmund
北垣直輝
興梶卓人
西田造